巻頭言

「パンを借りる男」

作家 曽野 綾子

外交にせよ、個人的な社交にせよ、私は当事者の国家や個人に、強烈な個性がなければ何もできないことを、いつも感じる。単純に言えば、必ず何らかの深い魅力が備わっていることが、外交の秘訣だろうと思う。

私は外交の本当の舞台を覗いたこともないのだが、国際的な会合の一隅に座ってそのドラマを作家としておもしろく眺めていたことは何度かある。その時、「あの人と話してみたい」というオーラがある人（つまり国の代表）でなければ、国際社会の注目の渦の中には立てない。国家にせよ個人にせよ、「関心に値する存在」でなければ、交渉の対象にはならないだろう。外交の「交」の始めである。

戦後教育は、人でも国家でも力がある存在はすべて「悪」だと若者たちに思わせていた。しかし力が悪いわけはない。私は耐える力など大好きだ。ただ一般的には、力というものは、「金力、権力、魅力」のうち、どれをどれだけ持つかで決まるらしい。

昔私の家に、私のファンだと自称する芸者さんが、しきりに遊びに来ていたことがあった。話のおもしろい、ちょっと理屈っぽいところもある人で、少しお酒が入ると、たまたま遊びに来ていた知人のカトリックの若い神父と論争になり、私は「タイヘンです。神父さんと芸者さんがケンカしてます」と出先から電話で呼び帰されたこともあった。その彼女が「やっぱり男の魅力は、お金と地位と名誉だわねぇ」とあっさり言うのを、私はナルホドと思って聞いていたのである。

国際社会でも、この三つは通りのいいものだろう。しかしその他に、腕力も要る。現実に相手をぶちのめす力を持ちながらそれを使わないのが最強の姿勢だ。外交は、歴史的に見れば、

裏切りと脅しの連続であるのだ。

こうした現実を見ずに、観念で平和を論じ続けて来た左翼シンパ世代は、辛うじて現政権に残っているだけで、最近やっと退場の日も近くなってきたようで、その後には現実正視の冷静な世代が続いて来たらしいことをこのごろしばしば感じる。

外交の場ばかりでなく、人の生き方の奥底で力を発揮するのは哲学と教養であろう。その上に、悪辣でありながら徳があり、冷酷でありながら慈悲を示すことができれば最高だ。しかし哲学と教養のない人に、教育も外交も政治もできるはずはないのだが、最近はその下地が見える政治家などほとんどいない。

国際会議の場で恐ろしいと思われるのは、会議場の廊下、会議のテーブルに着くまでの間の数分間の立ち話、コーヒーブレイクや着席の食事の時の隣席との会話などで何を語れるか、である。この時、その国を代表すると思われる人物のすべての持ち味があらわになる。とにかくどんな話にも、深い個性的な内容が要る。その結果、公のものを個人の話に変えて匂わせ、相手が話題にするものについてすべて何らかの個人的な見解や体験を持ち合わせていて、それを相手に婉曲に、しかし強引に伝えておく技術も要る。

外交に必要なのは強さなのである。聖書には、その裏付けになるおもしろい話がある。

或る男の家に一人の旅人が夜遅く着く。ホテルもレストランもない荒野の放牧民の暮らしでは、旅人には宿を貸し、パンと水だけは与えるのが習慣だ。しかしその男の家にはパンがなかった。それで仕方なく男は村の知人にパンを借りに行く。「もう寝たのだから帰ってくれ」という相手に対して、あまりしつこく頼むので、相手は渋々起きて来てパンを貸す。日本ではしつこさは悪だが、聖書にも代表されるセム人の社会では、「しつこさ」は堂々たる美徳と力の表現である。

それに加えて捨て身の胆力も勇気も要る。勇気がない人には魂の香気がないから、力を持たないのである。さしあたり脅し国家の中国に、まだODAを出してご機嫌取りをしようというような屈辱的な日本外交の在り方には、早く退場して頂かないと禍根が残るだろう。

曽野 綾子
その あやこ

1931年東京に生まれる。本名三浦知寿子。聖心女子大学英文科卒業。『遠来の客たち』が芥川賞候補となり文壇にデビューする。著書に『無名碑』『神の汚れた手』『天上の青』『狂王ヘロデ』『哀歌』『私の愛する妻』『貧困の僻地』『弱者が強者を駆逐する時代』『老いの才覚』他多数。1979年、ローマ法王庁よりヴァチカン有功十字勲章、1993年恩賜賞・日本芸術院賞、1997年海外邦人宣教者活動援助後援会代表として吉川英治文化賞、読売国際協力賞を受賞。2003年文化功労者となる。2009年10月日本郵政株式会社社外取締役。1995年から2005年まで日本財団会長。